

仏典童話

かもしかのこえ

花岡大学



善本社

かもしかのこえ

昭和六十一年十月一日発行

著 者 花岡 大学

発行者 山本三四男

発行所 株式会社善本社

〒101 東京都千代田区神田神保町一―六二
電話 東京(〇三)二九四―五三一七
振替 東京九―一一九五五七

印刷所 神谷印刷株式会社・三栄印刷株式会社

製本所 株式会社昇栄社

落丁、乱丁本はおとりかえいたしません。

ISBN4-7939-0191-3 C8393

かもしかのこえ

花岡大学



善本社

かもしかのこえ*目次



かえらぬはげたか

少年力士

そまつな服をきた王さま

シシリの勇氣

切り株太子

池の水

アノクの井戸

かもしかのこえ

しばられたカルナ

90

84

72

64

47

36

26

16

9



もちかし（餅菓子）のやくそく

108

沈んだたからもの

114

ちえの光

121

心にくしみあれば

132

ばかな男は どこにでもいる

140

ほんものをみる心

147

たからもののくるま

154

よくばりからす

162

作品解説

紀野一義

171



装画・さし絵
小西恒光

かもしかのこえ



かえらぬはげたか

(1)

一羽の、わかい はげたかが、いた。

たくましい からだを、して いた。

つばきも、めつぼう つよくて、矢のように はやく とぶことが できた。

目は、らんらんと かがやいて いて、とおくまで みえた。

足の 爪は、はもの（刃物）のように 光って いた。

くちばしは、するどく とがって、まがつて いた。

ちからも、とても つよい。

なかまは いうまでもなく、とらや、ライオンと、たたかっても、まけたことが
なかった。



ものすごい いきおいで、あいてを、あつというまに たおした。
だから、はげたかにとって、こわいものは、なにひとつ いなかった。
すると、つい じぶんの ちからを たのんで、いばりたくなる。

「やろうと おもえば、なんでも やれるさ。」

と、じまんして、かんがえるようになった。

そんな たかぶった 心になることが、いちばん いけない ことだった。

(2)

はげたかには、としよりの おとうさんが いた。

びようきで、すつかり よわって いた。

はげたかは、しんぱいで ならなかった。

なんとかして、はやく よくなって ほしいと、おもって いた。

とりや、けだものの、やわらかい 肉を もちかえって、たべさせた。

だが、ききめがない。

そんなとき はげたかは、

「山の むこうの、ジャングルに いる、にしきへびの肉を たべさせると、としよりは、たちまち げんきになる。」

と、いう、はなしを きいた。

はげたかは、おとうさんに、

「そんな 肉を、とつてくるぐらい なんでもない。あしたでも いって、とつてきてやるよ。」

と、いった。

すると、おとうさんは、あわてて、

「空に そびえている、あの 山の上には、おそろしい はげしい風が、ふいているんだよ。それに まきこまれたら、どんなに つよいものでも、こなみじんに くだきとばされて、しまうのだよ。やさしい おまえの心は うれしいが、けっして いっつては いけないよ。」

と、とめた。



しかし はげたかは、はやく おとうさんが、げんきになつて ほしくつて ならなかつた。

その おやを おもう、はげたかの やさしい心は、すばらしく うつくしい心だといふべきだ。

(3)

ところが、その うつくしい はげたかの心には、

「ちからが つよいので、やろうと おもえば、なんでも できない ことはない。」と、いう、たかぶりの心が、くつついて いた。

それで、おとうさんには ないしよで、こつそりと、

「おとうさんは、おれが どんなに つよいか しらないのだ。どんなに はげしい風が ふこうとも、そんなものに まけて たまるものか。おとうさんの びょうきが、はやく なおつて くれるように、いつときも はやく、山を こえて、肉を とり に いってこよう。」

と、おもった。

そして、あくる朝はやく、ものすごい 羽のおとを たてて、はげたかは、矢よりも はやく、青い空を めざして、とびたつて いった。

空に つきささるように そびえている、たかい 山を こえる あたりで、はげたかは、くろいごまのように、ちいさくなって、その すがたが みえなくなってしまうた。

そして、それっきり、ばんになっても、あくる朝になっても、いつまでたっても、もどつては こなかつた。

(4)

いったい、その はげたかは、どうなったのだろうか。

おとうさん おもいの、やさしい心をもっていただけに、きになって しかたがない。

たぶん おとうさんの いったとおり、山の上の はげしい風に まきこまれて、

こなごなになって、とばされて しまったに ちがない。

おやおもいのはげたかを、そんなめに あわせた ものは、なにだったのか、よく かんがえてみよう。

（南伝大蔵経・ジャータカ）